江戸見桜通信

第２号
2000.10.1
世話人　平井岩男
発行　江戸見桜の会事務局
044-866-5569　田村

俳句（寿詞）　時保

すえながく
かげみつ　くまのや
やまざくら
かげみつ　くまのや
やまざくら

久本山熊野森は、開発によって大きく変わろうとしています。その一方で、二つの古墳などが見つかり、遺跡発掘の本調査が行われています。

信仰の山と言われますが、どんな信仰だったのでしょうか。文字資料として唯一現存する熊野社寿詞（ことほぎ）を手がかりに、平井氏に寄稿していただきました。

熊野社とは

江戸期の地誌『武蔵国風土記稿』には、多摩川、鶴見川流域に約百十余社、橘樹郡で約三十社、川崎市内十七社の熊野社が挙げられ、末長の熊野社「阿弥陀堂」もこの中に含まれている。

古代紀伊半島に鎮座する山岳信仰の熊野本宮、滝信仰の那智、海洋信仰の新宮の三社が神仏混合しながら一つにおさまり、熊野三山とか、三熊野（みくまの）または三所権現、熊野（ゆや）権現と呼ばれ、中世庶民の熱烈な信仰をあつめるようになった。

曼陀羅の世界を映した
末長熊野森

初期の熊野参り

初期の熊野参りは、まず伊勢神宮を参拝し、熊野精進屋での禊ぎ祓いから始まる。途中各所の王子において禊ぎ祓いの行を修めながら、海や山の難所越えの辛苦を舐め、遠路遥々三熊野に至る「大辺路」（伊勢路）ルートであった。

その後、院政期、白河上皇の熊野御幸から始まる歴代上皇や貴族の辿った、田辺から入山する「中辺路」（紀伊路）が大辺路に替わり主流となった。

この頃から三山の宗教的組織も整った。

(注)参詣の途中、所々に若王子を勧請して祀ってある土地。

村に熊野社が建てられるまで

中世に入ると御師（熊野在地）と先達（各地からの案内）や庶民布教にたずさわった熊野比丘尼、聖、山伏達によって全国に広がった。これを支えたのは、各地の有力武士達である。

近世になると、社寺詣でに遊山的な要素が加味されるようになる。

東国では楽な伊勢参りが流行り、遠く難所が多くて辛い熊野詣では敬遠された。

そして、在地豪族や定住した先達らによって、村に熊野社が勧請創建されるようになった。

末長熊野森

末長の場合は、十二世紀～十八世紀頃に勧請されたと推定される。十王山（冥府）から熊野森（浄土）へかけては、一つの霊地として崇められるようになった。

ここで大事なことは、神奈川県下で大山を別にすると末長熊野森が唯一、熊野信仰の全てが現されている『熊野那智曼陀羅』の構図通り再現されていたと思われることである。

熊野那智曼陀羅との比較

熊野本宮（阿弥陀仏）は熊野森の阿弥陀堂にあたる、新宮（薬師如来）、那智（千手観音）は熊野森にヤクシ、カンノンジという地名がある。

※それぞれ諸堂の跡は諸説があり、確定できない。

曼陀羅には、阿弥陀、薬師、観音各浄土を現す桜が描かれており、熊野森には江戸見をはじめ桜が点在している。

渡海上人が補阿洛浄土へ船出する地に松の木があり、熊野森への参道である堂坂下辺りにマツギ（松の木谷）の地名がある。

熊野川にあたるのは、四っ池（池の谷）から落ちる用水路であろう。

十王山には、闇魔の庁を現す十王の石像と亡者を導く地蔵がある十王堂があった。

その山の麓には、「ゴミョーマエ」の地名と屋号があり、「後明前」と標記している。十王山の西に熊野森の三浄土が続く。

堂坂を下った辺りの用水に架かる橋、「オクラバシ」は禊ぎ祓いを行った所である。

「オーセッパラ」には、伊勢大神宮が勧請されている。

武州橘樹郡
末長邑

熊野大権現

壽慧奈賀久景三
具摩埜也山櫻時保

村の要所には、石仏や小祠、塚などがある。「カミオクリツカ」の付近に「三っ塚」があり別名「法界塚」とも呼ばれている。

その南にある西福寺古墳、ここには高僧の生身入定の言い伝えがある。これらは本来熊野森とは関係ないが、三熊野参りの大辺路や中辺路、また捨身行の渡海上人を想起させられる。

このように、熊野森を囲む景観は、村の人々に熊野信仰を強く印象づけたであろう。

時保の熊野社寿詞碑文の「景三具摩埜也」は、「三熊野の景」とも読みとれる。梅原時保は一八〇一年没。堂坂にあった碑は杉山神社に移されている。

解読は渡辺美彦先生による。

久本山熊野森俳句特集

ご協力本当に有り難うございました。それぞれの江戸見桜と熊野森が表現され、楽しい発表となりました。

開発により竹林も消えてしまうのでしょうか。京都の風情を残すこの地を、多くの方に訪れてほしいものです。

時保

寿慧奈賀久景三

具摩埜也山櫻

美保

緑陰をなしたる江戸見桜かな

桜幹の竹退けし涼しさよ

木下闇てふには足らぬ桜かな

元子

烏瓜咲く街角の坂がかり

街騒を断ちて踏みゆく竹落葉

病葉やいまに伝えし一古木

人知れず育ち直なる今年竹

若竹の脱ぎ忘れをる皮少し

卜人

草いきれ埋もれしみちを吾れもとむ

熱き日や江戸見桜は葉を巻きぬ

水論も様変わりしたミレニアム

Tokujiro

過ぎた日を見せずかげろう紗をまとい

悦子

白い粉をふいて青竹天をさす

桜樹には季節のかなしみ草いきれ

巨木にもしなだれかかる葛の花

横枝に子供の遊ぶ椎樹あり

人里は守る緑に護られて

良子

炎天も憂いも消える小宇宙

人知れず椎の花は咲き上る

あるがまま夏日を生きる森の主

喜美代

草いきれ抜けて仰げば桜立つ

かぶと虫神代の樹を登りゆく

ひたひたと森を飲み込む夏のくず

下草刈りをトラストの会の方々と一緒に行いました！

真夏の下草刈り体験記

伊中悦子

八月二十日は朝九時から、二十余人が手に手に鎌やはさみを持って草を刈り始めると、青臭さ、草いきれがあたりに漂います。篠竹、葛のつた、山ごぼう、背の丈ほどもある草むら。竹藪の中に山ほど刈り草を積み上げて、さっぱりと桜の根方が見えたときには、皆の額から汗が滴り、軍手は真っ黒。一時間ほどの作業で達成感は十分ありました。

次は、九月二十四日。十人ほどの参加でした。一ヶ月の間にはそれほどの夏草の跋扈もなく、桜の下は伸びた篠竹を刈るだけで済ませ、ターザンの木の周囲を整理しました。

ぜひ行って見てほしいと思うほど、すっきりしました。鉄柱やモーターなどの粗大ごみも片づけました。重く垂れた枝先も剪定し、軽くなって向こうに見える空を支えます。

この木は何の木？　と聞かれるたびに悩みましたが、参加者の詳しい人が「スダジイ」と教えてくれました。ちなみに、このターザンの木は二代目で、一代目はヒイラギだったとのこと。この森のこの地における歴史の古さ、人々の親しみの深さに、里山の意味を改めて知らされました。

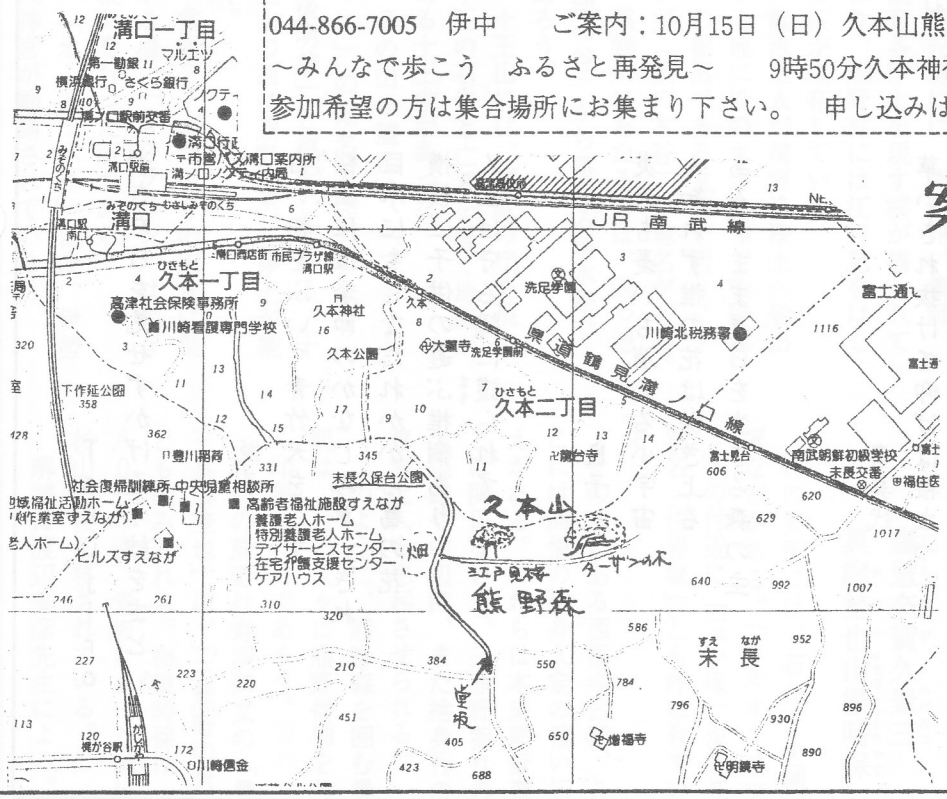
江戸見桜も、ターザンの木も、親しまれてこそ姿が美しくなります。熊野森の奥のシラカシ林も手を入れて、そこに生うという「キンラン」「ギンラン」を愛でたいもの。

開発が進み、斜面が露出して、竹林の中に遺跡試掘の溝が掘られています。寂しがる前に、どうかこの一部でも残せる手段はないものか、考え行動していきたいと思います。（川崎・多摩丘陵の里山を守る会代表）

※熊野森はオクマンサマで、オクマンサンという呼び名は、関西訛りという指摘がありました。

川崎・多摩丘陵の里山を守る　久本山熊野森ナショナルトラスト
044-866-7005　伊中　　ご案内：10月15日（日）久本山熊野森歴史散歩
～みんなで歩こう　ふるさと再発見～　　9時50分久本神社集合～12時
参加希望の方は集合場所にお集まり下さい。　申し込みはいりません。

案内図



許可なく木や草花を折らない、ゴミやタバコを捨てない、畑に立ち入らないなどルールを守りましょう。